

# 新 刊 紹 介

歌川光一著

『女子のたしなみと日本近代』

—音楽文化にみる「趣味」の受容—

平野 晶子



2019年3月20日発行

勁草書房

四六判 304頁

定価 3,400円（本体）

本書は、明治後期から大正期における中上流階級女子のたしなみをめぐる言説の変遷を「趣味」の受容との関係や「趣味」として行われることがらの和洋に着目しながら考察し、それらの問題と昭和初期に現われた「花嫁修業」というイメージの成立過程の関連を明らかにするものである。

第一章では、教育史研究、芸能史研究を概観しながら、明治後期から大正期の女子の稽古文化のあり方について、研究として何をどのように把握していくべきかが論じられる。稽古文化における「趣味」の受容を考察するために、視点を「稽古」から教習方法や機会にとらわれない「たしなみ」へと転換すること、本書が音楽のたしなみを題材にとり、それをめぐる規範やその変遷を検討するものであることを述べている。その上で、豊富な資料をもとに詳細で綿密な検討が行われていく。

第二章では、婦人雑誌や家政・修養書を資料としながら、家庭婦人の心がけとしての音楽のたしなみについて、当時隆盛した家庭音楽論における「趣味」の位置、家庭で行われる音楽の、邦楽／洋楽のジャンルによる役割の違いについての検討がなされる。第三章では、女子のヴィジュアル・イメージに着目し、家の娘としての「令嬢」／「少女」というジェンダー規範の違いによって必要とされるたしなみの対象の異同が明らかにされる。第四章では、理屈上は「たしなみ」が高じて生業となり得るところを、なぜ「たしなむ程度」にしか習得してはいけなかったのかについて、女子職業論から論述される。邦楽／洋楽それぞれに異なる理由によって、女性の職業として不向きであるという言説が存在したことが明らかになる。第五章では、行儀作法としての音楽のたしなみのあり方について、礼法書の

編集方針と音楽のたしなみに関わる記述の関連から考察される。理想像として掲げられる家庭音楽の実践が、身体レベルでどのように表現されたかが述べられる。

第六章では以上の考察が女子の音楽のたしなみの変遷として整理され、今日私たちが抱く「花嫁修業」というイメージが、明治後期から大正期の「家庭」という概念の登場・普及過程で起きた、「趣味」の和洋折衷化と結婚準備としての修養化によって成立したものであることが明示される。補論として、昭和戦前期における「令嬢」の音楽の「趣味」の考察から、「花嫁修業」として日本趣味が強調されるようになった背景が論じられているのも興味深い。

本書の特徴は、教育学において既に多く論じられてきた「稽古（事）」の徒弟的な教習方法や教育哲学、すなわち「芸道」「家元制度」等といった日本特殊論に拠らず、「学校／家庭／社会（通俗）」教育という教育の分化が未確立であった近代初期における「趣味」と教育、教養の能力観としての内在的関連を、「たしなみ」という視点から文化史的に捉え直そうとした点にある。従来「感興をさそう状態、おもむき、あじわい」また「ものごとのあじわいを感じとる力、美的な感覚のもち方。このみ」（『広辞苑』）というテイストの意味であった「趣味」が、明治後期から大正期の中上流階級女子において、婚姻後の夫や舅姑らとの「趣味の一致」のためにホビーの広さ（量）を強調する能力観へと変遷を遂げ、それが昭和戦前期に登場した「花嫁修業」に繋がられていったと結論づけている。近代家族論や「少女」研究の隆盛を受け、小山静子『良妻賢母という規範』（勁草書房 1991）、今田絵里香『「少女」の社会史』（勁草書房 2007）、稲垣恭子『女学校と女学生』（中公新書 2007）等の形で蓄積されてきた一連の近代日本の女子教育文化史の知見を、「たしなみ／趣味」、「令嬢」等の新たなキーワードによって編み直すことで、音楽史、芸能史を含む近代日本の文化史一般に示唆を与えるものとなっている。

本書は著者の博士論文『近代日本における中上流階級女子のたしなみ像—19世紀末から20世紀初頭東京の音楽文化に着目して』（東京大学大学院教育学研究科 2016）に、その後執筆の関連論文（『学苑』928号所収論文を含む）、書きおろしを加え再構成したものとのことである。「日本における『趣味』の受容の問題が、都市新中間層が百貨店などで『良い趣味』を購入した、というモノとヒトをめぐる消費文化論（神野由紀『百貨店で〈趣味〉を買う—大衆消費文化の近代—』吉川弘文館 2015—引用者）の課題であるばかりでなく、ヒトの能力観に直接関わる近代教育史の課題でもある」（本書、p. iii）という視点が、この研究の背骨となっていることを重視すべきであろう。

（ひらの あきこ 初等教育学科）